

夜をあるく

マリー・ドルレアン 作
よしいかずみ 訳
BL 出版

いまは夜^よなか。ぼくたちはねむっている町^{まち}をしずか^まにあるいていく。どんどんあるいていき、山^{やま}のふもとまでできた。夜のくらさに目^めがなれ、あたりがみえてきた。さらに、どんどんあるき、山のしゃめんものぼった。さあついた。ぼくたちは、すわって、山のむこうをみた。みえてきたのは、なんだとおもう？

おばあさんとトラ

ヤン・ユッテ 作・絵 西村由美 訳
徳間書店

おばあさんは、まいにち、もりにさんぽにいけます。あるひ、もりにさんぽにいくと、トラとであいました。トラとなかよくなり、いえにつれてかえりました。トラは、のどをゴロゴロゴロと、ならしています。しばらくすると、トラはのどをならさなくなりました。じぶんのくにへかえりたくなつたみたいです。おばあさんは、トラをくににつれてかえることにしました。

低学年

しんぱいなことがありすぎます！

工藤純子 作 吉田尚令 絵
金の星社

モモは一年生^{ねんせい}になってから、わすれものをしたことがありません。わすれものがしんぱい^{きょうかしよ}なので、教科書やノート^{あさ}をぜんぶランドセルにつめてあるからです。朝、モモが歩^{ある}いていたら、かずまくんに「ヤドカリみたい」といわれました。ランドセルがパンパンで、にもつもいっぱいだったからです。

かずまくんは、「わすれものをしないように、ぜんぶがっこうにおいてある」といいます。それってあり？

まじよばーのたまごやき

堀直子 作 木村いこ 絵
文研出版

まじよばーはびょうきでしんだおかあさんのおかあさん。ぼくとおとうさんのすむアパートにやってくるは、(魔女^{まじよ})みたいにながみがみうから、まじよばーってよんでいる。

ある日、まじよばーがおとうさんにぼくをひきとるといいだした。おとうさんとはなれるなんてとんでもない。ごはんがだいじというまじよばーに、ぼくはひとりでもごはんがつくれるということを見せなければいけない。ぼくはまじよばーとたまごやきたいけつをすることになった。

ぼくんちのねこのはなし

いとうみく 作 祖敷大輔 絵
くもん出版

かずま 一真の家で飼っているねこのこは十六歳、お母さんは、「人間でいうと八十歳くらいのおじいちゃん」と言う。ちょっと前までこははすごくいたずらで、ダンスや机の上にとびのっていたのに、今ではベッドの上で丸くなって眠っている。

そんなある日、お母さんは、ごはんを食べなくなって、床の上でぐたっとしていたのを見て、動物病院へつれていった。

こはは、高齢のねこに多い腎不全で、治らない病気だという。お母さんはこはの治療のために、点滴の針を注射することを覚えた。ぼくは、こはのために何ができるか考えた。

チョコレートタッチ

パトリック・スキーン・キャトリング 作
佐藤淑子 訳 伊津野果地 絵
文研出版

ジョン・ミダスは、ごはんやおかずよりも、あまいおかしが好きな男の子。とくにチョコレートがだいすきでした。ある日、ふしぎなお店でひとつぶのチョコレートをもらいます。それを食べてからというもの、歯みがき粉や朝ごはんが、とびきりおいしいチョコレートの味になりました。どうやら、口にふれたものはなんでもチョコレートにかえてしまう魔法のようです。はじめはおおよろこびしたジョンでしたが、だんだん魔法の力が強くなってきました。

チョコレートがだいすきなあなたにおくる、ふしぎなお話です。

高学年以上

飛べ！ 遺伝子を超えて

森川成美 作 森川泉 絵
国土社

となりのクラスに転校してきた亜麻里が、ふたごみたいにそっくりだといわれた紗矢。体育の授業で見た亜麻里の顔は、自分がこまった時にする顔と同じようだと思った。「あの…もし、よかったら、うちの班にこない？」と口をだしてしまい、ふたりで一緒にダンスの練習をすることになった。

放課後、公園で待ち合わせて練習をしていると、大きな雨つぶがひたひたに落ちてきた。「今日はちとせさん、おそいから、うちにきていいよ」と誘われて走った亜麻里の家には、うちとおなじ大きな将棋の駒があった。きっとおなじものが、たくさんあるにちがいないと思いつつも、その置物はみょうにこの家にはそぐわないと紗矢は思った。

ソラモリさんとわたし

はんだ浩恵 著
フレーベル館

無口といわれている小学六年生の美話。ある日、夏休みの宿題「童謡の歌詞をつくる」ためのメモ帳を落としてしまった。誰にも見られたくない、書きかけの言葉を書いた秘密のメモ帳を捨ててくれたのは、コピーライターのソラモリさん。彼女は初対面の美話に友だちみたいに話しかけ、大人げなくて時々だらしない、ちょっと変わったひとだった。

「言葉も、言葉の外にあるものも大切にする」というソラモリさんと美話のあいだで行われる〈言葉のレッスン〉。美話は次第に自分の中にあつた「言葉」と向き合っていく。

美話とソラモリさん、二人のひと夏の物語。